



九条はらまち

「はらまち九条の会」会報 No. 165

2011(平成23)年 6月17日(金)発行

<ドキュメント> 2011(昭和23)年3月の忘れられないこと、忘れてはいけないこと、伝えたいこと!

- 3月11日(金) 14:46 東日本大震災発生。震源地:宮城県牡鹿半島の東南約130^{km}、深さ約24^{km}、M9.0、震度:相馬市で6弱、揺れ:断続的に約6分間・15:50相馬市で7、3^mの津波を観測。
- 12日(土) 15:36 福島第一原発1号機で水素爆発。
- 14日(月) 11:01 福島第一原発3号機で水素爆発。
- 15日(火) 6:10 福島第一原発2号機で爆発。・9:38 福島第一原発4号機で出火。



3.11東日本大震災・大津波・原発事故・・・私はこう思う 3

科学技術妄信で 荒れたわが故郷

福島市

二上 英朗 58 著述業

南相馬市はじめ地震・津波・原発事故で壊滅的被害を被った故郷を思うと、いまだに信じられない。悪夢を見ているようだ。幼いころ遊んだ浜辺が激浪にのみ込まれて水没し、生家も壊れた。母校の体育館は遺体安置所と化した。

毎朝2時間、給水所に並び、川の水をくみ、避難して来た親族を迎え被災地の模様を聞いた。隣家の元消防署長は残された近所の屋内避難者宅の老人世帯を守護して回っているという。行方不明の同級生の名も新聞紙面から消えない。

40年前、アルバイトでテレビ局の助手として、建設中の第一原発の撮影に同伴した時に、誇らしく喧伝されていたコンクリート建屋が、大自然の前にあまりに小さく感じたものだ。知事がゴーサインを出したフルサール炉の3号機建屋が水素爆発し、放射性物質が漏れて、安全神話がもろくも崩れた。国と東電を責めるだけでは済まぬ。科学技術を妄信し、補助金行政にすがって来た政治判断が、この人災を招いたのだ。

原発災害は現在進行中だ。一滴の水のありがたさ、平凡な暮らしの大切さ、家族の絆を再認識し「神を畏れる」必要を思った。

2000年市議会で質問 「原発事故の対策を」

●今から11年前の原町(南相馬)市議会で水井清光議員《本会会員》は、JCOの臨界事故を踏まえ福島原発の事故を想定し、次のような質問を行っていました。

■①原町市民の避難道路として、北泉小高線、原町浪江線、原町二本松線、原町川俣線の整備を国、県に要望する。

②原町市としての原子力防災対策計画はわずか2行の計画文で終わっている。しっかりした資材や機材の準備、退避や避難のマニュアルが必須である。

③具体策として、東電との安全協定、他自治体との災害協力協定の締結。市民の健康相談、汚染検査と洗浄体制の確立、ヨウ素剤の配布、市職員原子力知識の向上と研修、退避避難場所の整備と訓練、市民への広報や防災手引き書の配布が早急に必要である。

■当時の鈴木寛林市長答弁 特に避難道路整備を要望する考えはない。防災センターは本市として要望するが、独自の設置や実施は困難である。

●つまり市としては「何もしない」も同然でした。11年前、万が一とは言え現在のような原発事故を想定し対策を講じていれば、少しは善処されていたはず。事故を心配していた人々は少数派で、今も昔もリーダーたちの想像力のなさが悲惨さを一層を深めています。

佐々木孝さん、母の千代さん、孫の愛さん



南相馬市原町区、佐々木孝さん(71)「放射能への不安で屋内退避地区からも人が徐々に離れていく。98歳の母がいた老人ホームも職員不足となり、母を自宅に引き取った。2歳の孫娘ら計6人で自宅に残り、物資不足が続く退避地区の様子をブログ『モノディアログス』で記し続ける。親鳥がえさを運んでくれると信じ、精いっぱい鳴く小鳥たちの姿を思い浮かべて」 一同市の自宅

3月21日付『朝日新聞』「被災地から」 佐々木孝さん(本会会員)は大震災で市外に避難することなく、ずっと原町区橋本町の自宅で過ごしています。市内の様子や、大震災、原発事故への思いを、そのブログ『モノディアログス』に毎日千文字で綴っておられます。

3月27日付『福島民友』投書より 二上英朗さん(福島市・本会会員)は、以前から原発の危険なことを月刊誌『政経東北』などで訴えてきました。一九九五年三月号「福島県の地震対策は万全か・誰もいえない原発の地震対策」、二〇〇〇年二月号「原発事故が起きたらとにかく遠くに逃げろ」、二〇〇〇年四月号「原発に欠落している本音の議論」など。そして今年震災直後の四月号では「国と東電のおこりが引き起こした原発事故・無視される浜通りの被災地」と題して、生々しい多くの被災写真とともに、東電、国や県の原発政策を厳しく断罪しています。



17年前に事故、予言の詩

南相馬の詩人 原発の危険訴え続け

神隠しされた街

若松 丈太郎

四万五千の人びとが二時間のあいだに消えた
サッカーゲームが終わって競技場から立ち去った
のではない

人びとの暮らしがひとつの都市からそっくり消えたのだ

(中略)

半径三〇kmゾーンといえは

東京電力福島第一原発所を中心に掲える

双葉町 大熊町 富岡町

(中略)

そして私の住む原町市がふくまれる

こちらにもあわせて約十五万人

私たちが消えるべき先はここか

私たちはどこに姿を消せばいいのか

(中略)

街路樹の葉が風に身をゆだねている

それなのに

人声のしない都市

人の歩いていない都市

(中略)

私たちの神隠しはきょうかもしれない

うしろで子どもの声がした気がする

ふりむいてもだれもいない

なにかが背筋をぞくぞくと襲う

広場にひとり立ちつくす

東京電力福島第一原発から二十五kmの距離にある福島県南相馬市の一緊急時避難準備区域一に、四十年前から原発の危険性を訴え続けてきた詩人がある。高校の国語教師だった若松丈太郎さん(七五)。十七年前に発表した「神隠しされた街」は、今日の事態をそのまま描き出したような作品だ。(文化部・石井敬)

街が東電・国に怒り

原発事故で屋内退避指示が出され、一時は「一」が言ってきた通りになっ

たといって、得意な気持ち

示が出され、一時は「一」が言ってきた通りになっ

たといって、得意な気持ち

示が出され、一時は「一」が言ってきた通りになっ

たといって、得意な気持ち

示が出され、一時は「一」が言ってきた通りになっ

たといって、得意な気持ち

示が出され、一時は「一」が言ってきた通りになっ

たといって、得意な気持ち

示が出され、一時は「一」が言ってきた通りになっ

たといって、得意な気持ち

示が出され、一時は「一」が言ってきた通りになっ

たといって、得意な気持ち

示が出され、一時は「一」が言ってきた通りになっ

たといって、得意な気持ち

示が出され、一時は「一」が言ってきた通りになっ



「国はエネルギー政策を見直してほしい」と話す若松さん 福島県南相馬市で

点を指摘する文章を発表 ショックを受けた」
若松さんの作品「神隠しされた街」(一九四四年)

「原爆のことが頭にあしきた街」(一九四四年)るかう、これは怪しいも

のではない、事故が起きたら大きな被害をも

たらすものを人間がコン

トロールできるだろう

か、という思いがあっ

た」

九四年には「チェルノ

ブイリ福島県民調査団」

に参加。住民が避難した

半径三十km地帯を訪ね

た。事故を起した原子

炉をコンクリートで覆っ

た「石棺」その展望台

では、放射線量の針が

振り切れた。

「自分の住む場所の状況と重ね合わせ、大きな原発に関する詩や評論を集めた『福島原発難民南相馬市・一詩人の警告』(コールサック社)が今月、刊行された。作品「神隠しされた街」は、予言的な内容に驚いた中原中也賞詩人アール・ビナードさんが英語訳をしており、出版の計画が進んでいる。



愛の旅路/東京新聞旅の会

「福島を守る／福島を取り戻す／福島を手の中に／／福島で生きる／福島を生きる」
「息子の寝顔を見つめる／きみには／幸せに生きて欲しいのだ／息子よ／父と母の願いだ／決意だ」(5月5日こどもの日に)「放射能が降っています。／静かな静かな夜です。」(3月16日)
前相馬農業高校教諭で福島市の詩人・和合亮一さんは3月16日からインターネットのツイッターで、ふるさとの福島や南相馬や子どもたちを思う詩を綴り、『詩の礫ぶて』徳間書店、『詩の黙礼』新潮社、『詩の邂逅かいこう』朝日新聞社などを出版されています。